
大晦日特番「Narou/Zero」

アヴェンジャー（残骸）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大晦日特番「Narrou/Zero」

【Nコード】

N6470Z

【作者名】

アヴェンジャー（残骸）

【あらすじ】

ザ・カオス！

大晦日に次元世界最大の混沌が巻き起こった！

（前書き）

初めに謝罪しておきます、私の筆が荒ぶった結果異様に長くなりましたorz

まさかの22000字オーバー……

皆様、心して御覧下さい 何様

P・S・本作には以下の方が以下のキャラを提供して下さいました！
皆様、本当にありがとうございます！

・s u f i aさん

『天童綾人』

・U・Tさん

『クラウドⅡストライフ』

『ザックスⅡフェア』

・ああああああああ！さん

『ゼロⅡスクライア』

『ザラック』

『デミル』オズマ』

・アマネ・リイラさん

『ファイム』ララウェイ』

・いかじゅんさん

『ヒナギク』

・イツキさん

『コルト』リバティ』

『ブルズ』アルフィード』

・カイルさん

『シュウ』ヤマト』

『レイトス』ザラ』

『ケイ』アスカ』

『ルチア』ルミナス』

・カガヤさん

『クロスロード』ナカジマ』

『ノアⅡナカジマ』

『萩城瑠樹』

『九柳哲』

『東光院怜』

・テラ吉さん

『タクヤⅡDⅡアルバトロス』

・ぱっつあんさん

『シキⅡKⅡアスタロト』

・暁 零さん

『天戸翔』

『蒼月竜哉』

・黒雨 蓮さん

『夜川泰子』

『朝霧白』

『氷堂心愛』

・神崎はやてさん

『リオスⅡコーネルド』

『エルトⅡクリーバー』

『ソフィアⅡジュリーストン』

『レーネ』

・赤黒さん

『ユウⅡクロサキ』

・鮮血の刻印さん

『ヴィレイサーⅡセウリオン』

『セレーネ』

皆様、ありがとうございました！

ミッドチルダ第3スタジオ

ルナマリア&メイリン「こんばんは〜！」

ルナマリア「いや〜、今年も後僅かねえ……………」

メイリン「そうだね」

ルナマリア「今年は震災に節電にTPPに^{オース}OOOにAGEにNSJに…………色々あつたわよね……………」

メイリン「うんうん色々…………って他は兎も角NSJって何！？そんなの無かつたよね！」

ルナマリア「嫌ねメイリン。^{ナデ}N a d e ^{シコ}S h i k o ^{ジャパン}J a p a nに決まつてるじゃない」

メイリン「そんな略し方今初めて聞いたからね！　って言うか無いからそんな言い方！」

ルナマリア「そりゃそうよ。今作つたんだもの」

メイリン「ウザインですけどこの人！」

ルナマリア「ウザイ位キャラが立ってないと忘れられるんだもの、ウザくもなるわよ」

メイリン「確かにキャラが薄いよりは濃い方が良いけどね。最近のアニメにも言える事だけど、その作品のオリジナリティが分からない物もあるしね」

ルナマリア「その点行くと私達は完璧よね。こんなにモノアイと私のみりきを宣伝してる作品は他に無いもの」

メイリン「それを言うなら魅力みりよくだよ。と言うか真似されないのは誰も真似したくないからってだけだし」

ルナマリア「嘘だツツッ！！！」

メイリン「本当だツツッ！！！」

ルナマリア「アレがそんな評価を受けてるハズがありません。さる方達から高い評価を受けてるのがその証拠ですうー」

メイリン「でもアクセスはまだ5万にも到達してません。ちょっと頑張った短編レベルですうー」

ルナマリア「そんな短編ありませんー」

フラメ（司会者席）「オイ好い加減にしろお前ら。話が先に進まないだろうが」

ラクス（司会者席）「困りましたわね……では收拾が着くまでの間、Fateシリーズについてのトークをする方向で話を」

フラメ「いや話題がManiac過ぎるだろ。着いて来られないGuestや視聴者を放置するなよ」

ラクス「では何の話題なら宜しいのでしょうか？ アフナー辺りですか？」

フラメ「それは メトークでやれよ。 と言うかGuestが着いて来られないだろが」

ラクス「何時も『知らないからしょうがない』 と言う姿勢には問題があるかと思いますが」

フラメ「分かるけどそれも場合に因りけりってヤツだよ。 今回はウチの馬鹿作者がした、厚かましい要請に応えてくれた作者一同への恩返し的な意味もあるんだ。 極力分かるネタで行くのが筋ってモノだろ？」

ラクス「まあ、一理ありますわね」

フラメ「取り敢えずそろそろGuestを呼ばないといけないし、あの馬鹿2人の漫才を止めるとするか」

ラクス「お任せしましたわ。 その間私は『三日月Nightの毒舌講座 ーリア充爆発しろー』を読んでいきますので」

フラメ「いや、Guestを迎え入れる準備をしろよ」

ルナマリア「そもそも私は色んなガンダムシリーズのゲーム作品に出演してるでしょ。 コレは私に人気があるって事じゃない」

メイリン「アレ全部シンのバーターじゃない。 『シンが出るからついでにお姉ちゃん出しとけば良いか』 みたいな発想なのは一目瞭然

だよ」

ルナマリア「そんな訳ありませんー。E VSでは低コストだからじゃんじゃん使われてますうー」

メイリン「代わりに誤射しまくって評価をズンドコ下げてるけどね」

ルナマリア「アレは私じゃなくてゲームが悪いのよ！狙った所に撃つても何故か味方に当たるんだもの！」

メイリン「皆さん聞きましたかー？この姉は『私を差し置いて』出演した上に、『自分の射撃の下手さ』を『ゲームシステム』のせいにしましたよー」

ルナマリア「本当にそうなんだってば！でなきゃ私がGは兎も角自分のコレクションを墜とす訳無いでしょ！」

メイリン「待ってお姉ちゃん、今激しくおかしい台詞が聞こえたんだけど。一体どーいう事？」

ルナマリア「発売まで口止めされてたんだけど、あの作品に出てるモノアイMSは」

（2人を爆発が襲う）

フラメ「お前ら、尺を少しは考える。折角の私のTalk on stageまで潰すとかさあ」

メイリン（無傷）「済みません、つい熱くなって」

フラメ「何時の間に回避したんだよ……」

メイリン「まあそこは主人公補正と言う事で」

フラメ「何か釈然としないけど、それで納得するしか無さそうだね。それじゃあ今日のGuest、Come on！」

（音と大量の紙吹雪に合わせてゲストがスタジオに入場）

フラメ「多いね……こうして見るとマジで」

リオス（紙吹雪を避けながら）「うん、多いね。……紙吹雪が」

メイリン「スタッフさん！ ちよっ紙吹雪が多いですよ！！！」

ルナマリア（包帯ぐるぐる巻き）「ぎにゃああああッ！」

ヴィレイサー「セウリオン」おい、約1名がドカ雪の如く降り注ぐ紙吹雪の下に埋もれたぞ」

メイリン「お姉ちゃんならスルーして頂いても大丈夫ですよ」

朝霧白「何てぞんざいな扱いなのですか……。ギャグマリアの2つ名は伊達では無いのです……」

セレーネ「アレがマスターの教えてくれたリアクション芸人なんです。……」

夜川泰子「あれ程悲惨な扱いの主人公もそうはいないな」

氷堂心愛「珍しいので写真を撮っておきましょう。皆に見せびらかして新年会の話のタネに」

白「鬼がココにいるのです！」

レイトス「ザラ「なあケイ、アレ助けた方が良くないんじやないのか？」

ケイ「アスカ「大丈夫でしょう。あの俺の知ってる御先祖と違ってしぶとさが異常だから」

ラクス「まあ的確な御指摘」

リオス「コーネルド「いや、皆助けようよ！ 幾ら何でも可哀想だつて！」

エルト「クリーバー「やれやれ、世話の焼ける……」

（ルナマリアを紙吹雪の中から引き摺り出す）

九柳哲「こりや人工呼吸が必要だな……。と言う訳で俺がじいでででで……！ 怜いいい……！ 腕はそんなに柔軟に曲がらなげやあああッ……！」

東光院怜「アンタってヤツは、ドサクサに紛れて何やろうとしてんのよ！ 今度と言う今度は覚悟しなさい……！」

ザックス「フェア「何と言うか、カオスだな……」

クラウド「ストライフ「（フラメの方へ顔を向けながら）フラメ、早く番組を進めた方が良くないんじやないのか？ このままだと何1つ

始まらずに新年にな……」

タクヤ「D「アルバトロス」へえ、そいつはCrazyなDaddyだな」

フラメ「だろ？ 私用に学校貸し切って1人入学式とか飛び過ぎって話でさ。つか実家に帰ると未だに風呂に一緒に入ろうとするんだよ」

タクヤ「Hu」 そいつは筋金入りだ」

クラウド「……ザックス、俺は呼ばれてる気がするから行つて来る」

ザックス「呼ばれてるって何にだ！？ 烏賊か！？ 烏賊になのか！？ 戻つて来いクラウドおおおおッ！！！！！」

ラクス「成程……。『肉はトコトン弄つて泣かせる』ですか……」

ルチア「ルミナス」あの、その本見せて頂けませんか？」

ラクス「ええ、宜しければこちらの布教用をどうぞ」

（暫くお待ち下さい）

フラメ「さて、皆が席に着いた所で始めるのは……コレだ！」

（大型モニターに種目が表示される）

ラクス「アルティメット亜留帝滅斗・クイズ苦威頭（戦わなければ生き残れない）」

ゲスト全員「ちよつと待てえーーーーーい！！！」

フラメ「What's? 椅子の座り心地が悪かったか？」

レーネ「What's? じゃないわよ！ 何この物騒極まり無いタイトル！ 確実に人死に出しそうじゃない！」

フラメ「落ち着けて。まだRuleを説明してないだろ？ He at upするのは、それからでも遅くないんじゃないか？」

レーネ「そ、それもそうね……」

フラメ「って訳でメイリンにルナ、頼む」

メイリン「ハイハイ このクイズでは、まず皆さんに予め伝えてある組み合わせでチームを組んで貰います。それからそのチームで、私達の出すクイズに答えて頂きます」

ザックス「何だ、タイトルの割に普通のクイズだな」

萩城瑠樹^{はぎしろ・るき}「だな……物騒な当て字がしてあるから身構えたけど」

ルナマリア「ココからが大事よ。この『苦威頭』は形式こそ良くあるクイズに見えるけど、1つ違う所があるの」

タクヤ「1つ違う所？」

ルナマリア「それは……こう言う事よ！（指を弾く）」

（何も起きない）

怜「ねえ、何も起きないんだけど……」

ルナマリア「あ、アレ？ ちょっとアヴェンジャー、どー言う事よ！ 打ち合わせと違うじゃない！」

メイリン「え……？ あ、はい。お姉ちゃん、駄作製造機から伝言だつて」

ルナマリア「は？ 伝言？」

メイリン「『トレミーなう。超電磁砲のゲームの限定盤と新しいPSP買って、オフ会に参加したせいで金欠になって持ち合わせが無いから例のザクの件は無しって事で頼むわ』だつて。……流石は逆赤版ラクス様の性格モデル」

ルナマリア「駄作製造機イイイイイイッ！……！」

心愛「何と言う裏事情」

白「と言うかあの人、番組の予算を何に使ってるのですか！ 無茶苦茶趣味丸出しな横領してるのです！」

泰子「まあ彼は後で逮捕するとしてルナ。一体どういうルールなんだ？」

ルナマリア「あ……ゴメンなさい。え〜と……簡単に言うとこのクイズに答える前に、皆にはまず手元のスイッチを押して貰います」

（ザックーン）

ルナマリア「そうするとこんな音が出るから」

セレーネ「何ですか今は……」

白「予算不足の理由が分かったのです」

ケイ「そんな所にお金掛けたらそうなるよなあ……」

ルナマリア「こんな音がしたら……」

哲「ツツコミ無視!？」

怜「ルナ、今完璧テンパってるわね」

ルナマリア「こんな音がしたら一先ず回答権その1を手に入れた事になるからね、ね……（カンペを見る）」

ザックス「いや、そこ暗記しとけよ」

ルナマリア「ゴメン、さっきのザクショックで覚えてた段取り全部飛んだから」

レーネ「ポンコツ過ぎるでしょ！ てかザクショックって何！？ ザクで何をする心算だったのよ！」

ルナマリア「（カンペを見ながら）え」と……、そうなったら各チームは1人ずつ代表を選んで前に出して。そのメンバーに野外のステージでして貰うゲームで1番良い成績を上げた人のいるチームがクイズに回答する事が出来る様になるから」

クラウド「随分手間の掛かるやり方だな」

ラクス「クイズだけだと頭だけになりますでしょう？ それでは偏りがあるので、こちらで体力もと思い追加したのです」

クラウド「成程」

レーネ「ザクで何をする気だったのよおおッ……！」

フレーム「（大型モニターを展開しながら）因みにそのGameが……コレだ！」

（１（ワン）２（ツウ）３（スリー）！）

リオス「今の効果音、凄い聞き覚えがあるんだけど」

ヴィレイサー「ああ。『２』が何故か凄いエゲ声だったが、間違い無くあの番組のアレだな」

シュウ・ヤマト「（ステージ中央を指差しながら）ココぞとばかりにネタを盛り込んでますね……ってそれよりアレ！」

白「こ、心愛ちゃんに泰子ちゃん、アレは何なのですか？」

心愛「アレは………！」

泰子「知っているのか心愛！？」

哲「また古いネタで来たな」

心愛「アレは伝説の凶技と恐れられた『殺須気（スケ）』。多くの挑戦者を迎え入れ、そしてその狂気に因って葬り去ったと言う呪われし催しです……！」

白「そんな恐ろしい物……！ 対策はあるのですか！？」

心愛「今の所2つあります。1つは挑戦して尚生き延びた数少ない踏破者であるケンに英にんに君……基伝説の3筋肉と謳われる『黒忍・磁雷弥』に『銀河の青獣』、そして『きん君』の技術を模倣し切り抜ける事」

ザックス「ちよつと待て。その最近観ないメンバーはアレを踏破してないだろ。単に名前が有名なだけだろ」

ソフィア「ジュリストン」本当に……今何処に行ったんだろっ、照」

セレーネ「マスター、きん君なら最近一緒に見ましたよね？」

ヴィレイサー「いや、人違いだろう。あんな所をあんな感じの芸人が歩くハズは無い」

リオス「取り敢えず、今二ジャブツクヤンガルーとかの所在は確認しなくて良いと思う」

白「それで心愛ちゃん。2つ目の策は何なのですか？」

心愛「簡単な事です。それは」

白「それは？」

心愛「（集中線付きで）白さんが、私との婚姻届にサインをする事ですッ！……！」

白「全く『殺須気』と関係無いのです！！　　と言いか何度も活動報告で言っている様に、白と心愛さんは結婚出来ないのです！」

心愛「無理を通せば法律と言う道理なんて引つ込むと、某書房で山田丸の船長も述べています」

白「誰なのですか、そんな無茶苦茶な本を書いたのは！」

その頃、チームA

瑠樹「……取り敢えずあつちは置いといて真剣に対策を練ろう」

怜「そうね……結構洒落にならない仕掛けばかりだし」

タクヤ「問題は、アレの難易度の基準がフラメ基準だって事だな」

哲「あの子、敵幹部の中で一番速くて目が良いつて話だったな。個人的には胸もうごべらッ！」

怜「何処見てんのよこの馬鹿！　天誅！（肘鉄）」

瑠樹「（スルー）道理であの刺付き鉄球が残像を見せる程の往復速度な訳だ……。正直一般人の俺達には無理だな。タクヤはどうだ？」

タクヤ「ちよいとばっかしHardな仕掛けだが、まあ限界まで力を振り絞ればどうにかなるかもな。久し振りにマジになるか……」

怜「無理はしないですよ。いざとなればギブアップしても構わないから」

タクヤ「Thank you.けど、ココで退いてちゃ今後やってけそうにないからギリギリまでやってやる」

オルフェイス<Buddy、どうせなら盛大にブツ放してあの女の間抜け面でも拝んでやろうぜエ>

タクヤ「OK! It's showtime! Ya-ha!」

チームB

シュウ「あつちは予想通り、か……」

ヴィレイサー「まあ、妥当な線だな」

レーネ「それで、アンタ達自信はあるの?」

シュウ「仕掛けが今姿を見せている物だけなら、五分と五分って所かな」

ヴィレイサー「フレームの事だ。別の仕掛けも隠していると見て間違いないだろう。アイツはあの手の悪戯には手を惜しまないからな」

レーネ「その気力を仕事に向けるって発想は無いのかしら」

ヴィレイサー「それがあれば、俺がアデルの愚痴を聞く回数は今の20分の1になってるよ」

セレーネ「全く……、ツンデレさんには困ったモノですよね」

ヴィレイサー「ああ……。アイツは可愛いのに顰めっ面ばかりだし、本当の事言つと顔真つ赤にして平手打ちするし……」

セレーネ「私はあの人と違ってそんな事しませんけどねー」

レーネ「はいはい分かった分かった。それで、結局どっちが出るの？」

ヴィレイサー「俺が出よう。アイツのやり口は大体把握してるからな」

レーネ「頑張んなさいよ。負けたら許さないんからね！」

ヴィレイサー「（わざと恭しく礼をしながら）畏まりました、レーネ様」

チームC

白「す、すっかり要らない時間を取ったのです……（肩で息をしながら）」

心愛（気絶中）

エルト「僕が押さえ込むのに苦労するなんて……」

ソフィア「コレが愛の力なんだね……」

エルト「今の光景を見て何故その感想が出たのか気になるんだが……」

白「エルトちゃん！ そんな事より早くバインドして欲しいのです！ 心愛ちゃんをきっちり縛っておかないと！」

エルト「あ、ああ……」

心愛「う、うーん……ハッ！ こ、コレは！（ぐるぐる巻きで椅子に結わえ付けられている）」

白「もう目が覚めたのですか！？」

心愛「愛は偉大なのです」

白「尤もらしい名言を使わないで欲しいのです！」

エルト「2人は放置するとして……そろそろ行つて来る。ソフィア、後は任せる」

ソフィア「分かったよー 気をつけてねー」

チームD

レイトス「それにしても、まさか1発目からあんな物を繰り出して来るとは……」

ザックス「フラメの性格と能力ならやりかねないとは思っていたけど、アレは全力でやらざるを得ないな……」

レイトス「それもそうだが、クイズも難しいんじゃないか？ フラメは色んな世界を渡り歩いてるそうだから知識はあるだろうし、ラクス様達だってMSにはかなり詳しいハズだから……」

リオス「ラクスは何か他の方向の知識も得ているみたいだしね……
(汗)」

レイトス「……そうだな。俺達の知っているラクス様と違い過ぎだよ……」

ザックス「まあ、分かる範囲の物を答えて行けば良いさ。2人共頼んだぜ」

リオス「うん！」

レイトス「ああ！」

チームE

泰子「凄まじい仕掛けだな……」

ルチア「そうですね……。こんな物が世の中にあるのかと、そう感じてしまいました」

ケイ「MSの戦いは慣れましたけど、こんなのと向き合うとは思いませんでしたよ。世界は広いですね……」

クラウド「あそこに並んでいるMCや番組の総指揮を取るアヴェンジャーの性格を考えると、更にエスカレートすると考えて良いだろうな」

ルチア「アレ以上、ですか……？ 想像が付かないですね……」

クラウド「それが普通だ。アイツらの行動は、常に常識の範疇を超える。……力を抑えながらと言うのは、やはり厳しいか……」

泰子「だろうな。だが、見せ過ぎて底を知られるのも得策とは言えん。加減は厳しいが、そこは君の技量に任せるとするよ」

ルチア「無理はしないで下さいね」

クラウド「ありがとう。……行つて来る」

20分後、司会者席

フラメ「ふえるふあるふあふいまっふあみふあいふあふえ（訳：出るヤツは決まったみたいだね）」

ラクス「ほもほうへふはふえ。ほふあふあふあ、ふあふひふあふふえふえふいふえふあひふおひふえふ（訳：その様ですね。皆様、やる気に溢れていて何よりです）」

メイリン「2人共喋るか食べるかどっちかにして下さい！ って言うか何ですか！ このフライドポテトに掛かつてる塩の量は！？ そもそも仕事中だし！」

ラクス「皆様がメンバーを選んでる間には、私達は手持ち無沙汰ですし。何よりオールナイトの企画である以上、出来る時に休んでおかないと」

フラメ「そういう事さ。それに塩付けないと食べた気がしないだら？」

メイリン「にしても山盛りは無いですよ！ 身体壊しますって！」

フラメ「大丈夫だ、戦って汗掻いて流すから」

ラクス「私も久し振りに自分のインフィニットジャステイスで無双しようとしておりましたし」

メイリン「迷惑過ぎる！ この人達本当に迷惑過ぎる！ でも、随分早くメンバーが決まりましたよね」

フラメ「まああのLevelのAttractionなら参加可能な面子は絞られるからね。メイリン、Quizの準備は出来てるか？」

メイリン「はい。そっちは完璧です。お姉ちゃんにクイズの問題を書いた紙を持つてるかどうか確認しましたし」

フラメ「OK、Perfectだね。それじゃあ、今から始めるよ」

メイリン「皆さん、準備は出来ましたかー？」

ゲスト全員「オオーッ！！！」

ラクス「それでは、第1問です！」

ゲスト全員「ゴクッ……」

ルナマリア「私の愛用しているMSコレクションの中でも、足回りが1番綺麗なのはどのMSで……」

全員「ちよつと待てええええッ!!!!!!!!!!」

ルナマリア「（小首を傾げて）？ 何？」

メイリン「ちゃんと紙を持ってると思ったらあー！ そんなのお姉ちゃんの匙加減だからあー!!!!!!」

ルナマリア「嘘オ！？ ブログでも散々書いたのに！」

メイリン「見てないからね！ お姉ちゃんが思ってる程皆あのブログ見てないから！」

ラクス「皆さん、申し訳ありません。私が代わりに問題を出します。えー……御馴染アイテムの……」

メイリン「ストップストップストーリーップ!!!! 何を当たり前みたいに用語を出してるんですか！」

ラクス「コレは最近の社会人の常識でしょう？」

メイリン「違いますから!!!!!!」

フラメ「ああもう良いよ。私が問題を出すから」

メイリン「頼みますよ……」

フラメ「私がこの間ふらつと行って滅ぼした次元せ」

（暫くお待ち下さい）

メイリン「（血の付いた金属バットを持ちつつモニターを展開して）
コホン。……お騒がせしました。と言う訳で私が問題を」

ゲスト全員（真剣な表情）

メイリン「『禁断の刃』に登場している『武具融合』。さて、この漢字は何と読みますか？」

（ザックーン）

ラクス「早いですわね……」

ルナマリア「まあ、禁断を読んでくれている皆にはサービスみたいな問題でしたからね……。でも皆早いなあ……」

タクヤ「（振り子の要領で迫る鉄球を避けながら）Shit!」

ザックス「（編み込まれた紐を伝って移動しつつ、下の池から襲い掛かる猛獣を迎撃する）チッ……!」

エルト「（床から突き出す槍を見切りながら）ッ！ 早いな……」

ヴィレイサー「（突き出たスパイクを利用して坂を登りながら）この程度……!」

クラウド「（高速回転する柱を駆け上がりながら）速い……だが!」

タクヤ&ザックス&エルト&ヴィレイサー&クラウド「オオオオオ
ッ！！！！」

(グッフーン)

メイリン「はい、スイッチが押されました！ 押したのは……」

ゲスト全員(緊張した顔)

メイリン「ヴィレイサーさんです！」

レーネ「良し！」

メイリン「それではチームBの皆さん、正解をお願いします！」

セレーネ&シュウ&レーネ「ウェポン・バルカ！」

メイリン「正解です！」

(ぺちっ)

白「音響！ ちゃんとするのです！」

(ぱぱぱーぱーぱっぱーん)

ザックス「どつかで聞いた音だな」

クラウド「俺もそんな気がする」

ヴィレイサー「メタな台詞は止せ」

メイリン「それでは皆さんが“1stステージを突破した”ので、ステージが2ndステージに移ります！」

タクヤ「何……だと……？」

メイリン「2ndステージに移りますので、皆様は近くの転移魔法陣に移って下さい」

エルト「何処に転移するんだ……」

メイリン「それは逝ってからの楽しみですよ（ニッコリ）」

ヴィレイサー「待てメイリン字がおかし」

メイリン「では皆さん頑張ってくださいね」（ポチツとな）」

（転移魔法陣が発動）

怜「メイリン、一体彼らを何処に送ったの？」

メイリン「オールライダーとディケイドが戦争してる所に」

リオス「何してるのおおおおッ！……！！」

メイリン「（モニターを見ながら）あ、シザースが蹴り飛ばされた。と言うかブライトルーパーが足蹴にされてる」

リオス「ディケイドオオオオッ！……！！」

哲「うはあ……これはひどい」

白「と言つか、早速変なのに絡まれているのです!」

王蛇「何だお前ら……イライラさせやがって」

カイザ「俺の邪魔をするんだな、お前」

ヴィレイサー「オイ、何だこのキレる中学生が大きくなった様な連中は」

エルト「喻えが的確過ぎて何も言えないな。取り敢えず正当防衛で気絶させるぞ」

フレーム「(頭に出来たタンコブを押さえながら)あ、取り敢えず第2問を始めるよ」

白「間違い無くそんな能天気な状況じゃないのです! 超の付くサバイバル状態なのです!」

フレーム「いや、アレが第2問用の殺須気のStageだからさ。因みにStage内容は『進行方向にいる悪役Rider+ライオトルーパーx500を倒して、戦場から離れた所に設置したSwitchを押す』だ」

怜「それ、最早元ネタ関係無くなってゐるわよね。と言つかアトラクションですら無いし」

フレーム「細かい事は言いつこ無し、だ。それに進行Routeは平坦な道じゃない。山あり谷ありの起伏に富んだ場所だ。ディケイド

を倒す為に攻撃しまくってる連中の流れ弾だつて有り得る。身体を動かすActionとしてはある意味究極だろ？」

ルチア「一理ありますね」

白「無いです！」

ラクス「（スルーしながら）では第2問です。『禁断の刃』で敵幹部の1人として登場した『銃のドンナ』。彼女が使う『聖バロウの守護』は、どんな特殊能力でしょうか？」

（ザックーン）

フレーム「コレまた早いね……」

ルナマリア「まあ、序盤で出たネタですしね。まああの頃は駄作製造機が素人過ぎて色々と酷いですけど」

メイリン「『自分の中では全て失敗だった』って言ってるし、酷評された箇所でもあるしね。まあそれを言ったら他の也大差無いんだけど」

ラクス「自虐はその辺りで止めておきましょう。それより皆さん、凄いですわね」

フレーム「だね。ところでラクス。RiderのSignが欲しいって企画の提案中に言ってたけどさ、誰のSignが1番欲しいんだ？」

ラクス「そうですね……、甲乙付け難いのですが……」

フラメ「ふんふん」

ラクス「ディケイドですわね」

リオス「無理でしょそれ！ 明らかに話が出来る雰囲気ですら無いし！」

ラクス「大丈夫ですわ。刹那さんは言葉の通じないELSと対話したらしいですし」

リオス「一緒にして良いモノじゃないから！」

???<Final vent>

ソフィア「ねえ、今不穏な音声がモニターの向こうから聞こえたんだけど……」

ケイ「あの緑色のヤツ……！ もしかして……！」

ヴィレイサー<クツ……嫌いヤツ！>

ゾルダ<お前達にかかずらっている暇は無い。吹き飛んで貰う>

タクヤ<That sucks……！ とんだイカレっぷりだぜ……>

オルフェイス<やってくれるぜあのFcking野郎……！ B u d d y！ ステージは後回しにして野郎をボコすぞ>

タクヤ<ああ!>

クラウド<クッ……!>

キックホッパー<お前……今相棒を笑ったな……?>

クラウド<別にお前達に興味は無い>

フラメ「Hu」 良いねこの感じ。Heat upして来たよ」

瑠樹「いや、コレ只のカオスだろ。色んな方面からの苦情がありそうだな……」

ルナマリア「アヴェンジャー、ヤケクソでこの企画立てたから……。と、そうこうしてるウチに到着したみたいね」

ザックス<ハア……、ハア……。キツかった……>

(ドムーン)

ラクス「ではチームDの皆さん、回答をお願いします」

リオス&レイトス「『過去の自分を現実に投影する』能力!」

(ばばらばばつぱつぱー)

ラクス「正解です!」

フラメ「じゃあ、ディケイドの様子がヤバそうだし皆を戻すよ」

（飛ばされた5人がスタジオに戻って来る）

ヴィレイサー「（肩で息をしながら）流石に……中々手強い連中ばかりだったな……」

ザックス「だな……。あんなのと年末に戦うとは思わなかったぜ……」

ラクス「お疲れ様です、皆さん。取り敢えず1時間休んで下さい」

タクヤ「OK……1時間？」

ラクス「ええ。1時間後に次のアトラクションに挑んで頂くので」

ヴィレイサー「今度は何処に送る気だ？ 次も戦場とは言わないよな？」

ルナマリア「はい、ココで一旦CMです！」

ラクス「……さて、CMの間にエルセアのアデルさんに連絡を取らないと……」

ゲスト全員「誤魔化すな！！！」

なのは「うーん……最近ドカンと撃てないなあ。そんな悩みを抱えている皆さん」

はやて「そんな時はコレや！ 『スカット1撃』！」

なのは「わあ、何だか凄く効きそうな名前だね！」

はやて「名前だけやないよ。このドリンクにはスポーンの血にヨジデーにマーシム、トセイオツにベアウルの胆にレリック改まで入っとる。効果は抜群や！」

なのは「凄いね……。でも、そんなに混ぜてたら高いんじゃないの？」

はやて「そんな声にお応えして、1ケース31本が何と9300円！」

なのは「うわ、安い！」

はやて「更に今ならブルーレイのデッキにアストロスイッチと黒マテリアとロトの剣を付けてお値段そのままや！」

なのは「えええッ！？ そんなに付けて大丈夫なの！？」

はやて「それだけやない。今なら金利手数料から運送費まで全てはやネットが負担するよ！」

なのは「コレは今すぐ電話しないと！」

戦闘機人達に最大の危機が訪れる！

蟹っぽい怪人「あのさあ、名前変えてくんない？」

スカリエツティ「何でだい？」

蟹っぽい怪人「お宅らの使ってるナンバーズって名前さあ、ウチが資金稼ぎに作り上げた宝くじの名前と被ってるんだよね」

スカリエツティ「むう……本当だ。コレは済まない事をしたね」

突き付けられた現実には亀裂を生む。

スカリエツティ「と、言う訳で君達は今から『ナンバーズ』改め『モケベルク』だ」

デイエチ「何でそんな名前に……」

スカリエツティ「決まっている。被らないからだよ」

為す術無く窮地に陥る彼女達……だが、希望は失われていなかった！

チンク「例えドクターの言葉でも、それを認める訳には行かない！」

ウエンディ「アタシ達は、自分が自分である為に……ドクター！
アンタと戦うッス！」

セツテ「ドクターに逆らうのなら、容赦はしません」

その亀裂に乗り、陰謀が動き出す。

ユーノ「コレで僕達の時代が来る……」

クロノ「ああ。ヤツらを倒し、今度こそ主要メンバーに返り咲く。ユーノ、君の命を僕に預けてくれ」

ミッドチルダを揺るがす波乱の行く末は？

コードナンバーズ
　　ゝ反逆のカリムゝ

200011年夏、公開未定。

カリム「全て、私の計画通り」

リオス「なのはああああッ！！！！何してるのおおおおッ！！！！」

瑠樹「最初のも気になるけど、2番目の映画は何なんだよ……」

哲「まあ……、今は今ので……」

白「無しなのです！　　と言つか内容以前に公開予定がメチャクチャなのです！」

エルト「しかし、カリムは何処を目指しているんだ……？」

クラウド「それはカリムに聞かない事にはどうにも、な……」

フラメ「アイツは昔から分らないヤツだからね。それはさて置き、

エルセアのメンバーがそろそろ企画を始める時間だから通信を繋げるよ。アデルー！」

ミッドチルダ西部、エルセア

アデル「はい！　こちらスタート地点です！　『次元世界縦断！ウルトラダイストラベル！』がもう間も無く開始致します！」

（歓声）

アデル「ルールは簡単。予めAからEまでの5つのチームに分かれた皆様には渡してあるダイスの出目に合わせたポイントまで転移して貰い、それを続けてアルハザードまでの道を競って頂きます」

アデル（『申し訳ありませんカレン様』）

フラメ「いよいよかぁ……どんなGameになるか楽しみだね」

フラメ（『What's?　何かあったのか?』）

アデル「私が聞く所に因ると、途中のポイントには色々な指令やトラップが仕掛けてあるとの事ですからね……気合の入っている参加者の皆様がコレをどう捌くか……私も楽しみです！」

アデル（『参加者の1人のユウ・クロサキさんが、未だにココに着けずにノロノロと迷っているんです……』）

フラメ「そうか。それじゃあ参加者にMessageだ。Good luck！」

フラメ（『は？　クラナガンからエルセアだろ？　電車で30分じ

やないか』)

アデル「ありがとうございます！ それでは皆様、用意は宜しいです
ね？」

アデル（『乗るホームを間違えた挙句、何を考えたか転送ポートに
乗って別の次元世界に行った様なんです……』）

ゲーム参加者全員「おおおおッ！！！！！！」

フラメ（『O o p s……。そう言や、アイツって方向音痴だったな
……。今何処にいるんだ？』）

アデル（『……スタッフに捜させた所、今第52管理世界にいると
の事です』）

フラメ（『どういうRouteを通ったら、電車で30分の行き先
が竜の巣になるんだよ……』）

アデル（『一応エルデ様が向かっていますので程無く発見出来ると
は思いますが……』）

フラメ（『O K。……にしてもまさかこんな事になるとはね』）

アデル（『申し訳ありません。私の手落ちです』）

フラメ（『N o b i g d e a l・私も今の今まで失念してたん
だ。責任はこの事を確り確認してなかったアヴェンジャーに擦り付
けりゃ良い』）

アデル（『ありがとうございます』）

フラメ（『それで良い。じゃあそろそろ念話を切るよ』）

フラメ「それじゃあそつちもHeat upしてるみたいだし、そろそろStartしなよ」

アデル「はい！ 皆様、それでは始めますよ！ 手持ちの巨大ダイスを転がして下さい！」

（ダイスを全員が転がす）

アデル「ええと……、成程こうなりましたか。それでは皆様、頑張ってゴールのアルハザードを目指して下さい！」

参加者全員「おおーッ……！」

（全員が転移する）

アデル「さて……、それでは中継モニターで皆様の動きを追って行きましょう」

フラメくあー、アデル。その前に質問だ>

アデル「はい、何でしょうか？」

フラメくヴィレイサーとはどの辺まむごおッ！？>

ヴィレイサーく（フラメの口を押さえながら）アデル………今のは無視してくれ>

アデル「あ、当たり前です！ 私がそんな事を言う様な女に見えますか！」

ヴィレイサー「いや、そうは言っていないだろ……」

アデル「アナタのその顔は言っても同然の顔です！」

セレーネ「自意識過剰なんじゃないですか、ツ・ン・デ・レさん」

アデル「だ、誰がツンデレですか！ ヴィレイサー、まだこの欠陥デバイスの賤をしていないんですか！ アナタと言う人は……！」

ヴィレイサー「……悪かったよ。怠けた事もお前を疑った事も謝る。お前が心配で仕方無くて……つい、な」

アデル「な……なあ……！（赤面）」

セレーネ（紛う事無きツンデレですよ、やっぱり……）

スタジオ

心愛「何と言う惚気……私達も負けていられません！」

白「何の勝負ですか……！」

心愛「私と白さんの間に存在する愛の深さを世間に知らしめる勝負です！」

白「そんな物は無いのです……！」

ラクス「アレが生モノのGLなのですね……」

リオス「違うから!」

ザックス「ラクス、どの方向を目指してるんだ……」

クラウド「……分かん」

フラメ「旅と言えば、ウチの馬鹿作者は車がダメでさ。特にTaxiは乗る度に気分悪くなってるんだよね」

クラウド「その程度ならまだ良い方だ。俺の知り合いには乗るだけでアウトなヤツもいるからな」

ザックス「ああ、腐海 in the 飛空艇事件か」

シュウ「名前の時点でオチが分かったんですけど。大惨事以外にイメージ出来ないんですけど」

クラウド「あの時は大変だった……。番組が後日撮り直しになっ
た……」

瑠樹「何があつたか気になるけど、聞かない方が良さそうだな。オ
チ的な意味で」

レイトス「……だな」

哲「乗り物と言えば、メイリン」

メイリン「何ですか、哲さん？」

哲「いや、『逆赤』で戦艦乗り回してるよな。しかもインメルマンターンとかバレルロールとか無茶苦茶ハイレベルな操縦技術駆使してさ。『運命』の時にはそんな描写を見なかったから気になってたんだけど、アレって何時身に着けたんだ？」

怜「それはアタシも気になってたわね。簡単に身に着く物じゃないと思うし」

メイリン「ああ……、やっぱり突っ込まれますよねえ……」

泰子「あまり話したくない事なのか？」

メイリン「いえ、そう言う訳ではないんですけど……」

ルナマリア「それを話すと山あり谷あり、笑いあり涙あり感動ありの大長編スペクタクルに……」

怜「成程……。良いわ話さなくて」

哲「メイリン、何かあったら相談してくれ……。俺らで良ければ力になるから」

泰子「あまり力にはなれんかもしれんが、いざとなったら呼んでくれ」

メイリン「ありがとうございます、皆さん」

ルナマリア「アレは雪がそぼ降るクリスマス・イヴ。街の片隅でラ

イターを売ってその日の稼ぎを得ようとし」

ケイ「いや、誰も聞いてないですから。と言うかあからさまな捏造しないで下さいよ」

ルナマリア「チツチツチツ。アレンジって言ってよ。某小さな子ちゃんも実話をアレンジした名作なんだから」

リオス「いや、ルナのそれはウソのレベルだから。ウソ99%に本当1%はアレンジって言わないから」

ルナマリア「何……だと……？」

その頃、ウルトラダイストラベル参加者

チームA

てんどう・あやと
天童綾人「ダイスの目は3だから、この辺だな」

ヒナギク「確か、指定された区画内にいるスタッフの指示に従うんでしたよね？」

ファーム「ララウェイ」そのハズですけど……あ、あそこにいましたよ！（スタッフを指差して）」

スタッフ「チームAの皆さん、お疲れ様です。早速ですが指令です」

3人（ゴクツ……）

スタッフ「今から3分後に、ココを車が通ります。その時にこの紙に書かれた台詞を同時に言って、それに合わせて出て来る相手を倒

して下さい」

ヒナギク「あ、はい」

ファイム「分かりました」

スタッフ「ええ。それでは私は次の指令があるので、コレにてドロ
ンします（姿を消す）」

綾人「また古い消え方を……」

ヒナギク「それはそうと、この台詞は……」

ファイム「色々とマズイ気がするんですが……」

綾人「確かに……。でも、ルールだしなあ……」

ヒナギク「そうこう言ってるウチに来ましたね……（赤くて長い車
体の車を指差して）」

綾人「……仕方無い、叫ぶぞ」

ヒナギク&ファイム「はい」

3人「せえのオ……！ 『お父さん、カレンさんを私に下さい！』」

男「カレンは渡さああああんツ！！！」

（車のドアを強引に開けて突っ込んで来る）

綾人「うわっ、危なッ！」

ヒナギク「おおっと！」

ファーム「わわっ！？」

（爆音と同時に男が突っ込んだビルが倒壊）

ヒナギク「（倒壊するビルを見ながら）……………アレって、もしかして…………」

綾人「もしかしくなくても、フラメの父親だな…………」

ファーム「…………アデルさんが陰で愚痴を零す理由が分かりました…………。声や顔が渋くても、アレでは全て打ち壊しですね…………」

男「どうあれだああッ！！ ムウアイエンジェルを私から奪おうと宣戦布告して来た、命知らずはああああッ！！！」

綾人「はーい（2人の手を握って一緒に振る）」

ヒナギク＆ファーム「！？」

男「許すアアアアン！！！！！」

綾人「（バルムンクを構えつつ）オイオイ、何か剣と盾持って突撃して来たぞ…………」

ヒナギク「（千本桜を展開しつつ）ファームさんは下がって下さい。あの人、あんな残念な人でも只者ではなさそうですから」

ファーム「了解です。気をつけて下さいね」

男「くあくごおおおおッ！！！」

ヒナギク「（攻撃を受け止めつつ）ッ！ 重い……！」

男「ほお……やるなあ。だが……！」

ヒナギク「うわっ……！（跳ね飛ばされる）」

男「パワーが足りんな。パワーが。そんな腕で」

綾人「貰ッ……！？」

男「このサラマイドⅡロットに勝てるものかああああッ！！！」

（全身から赤い衝撃波を放つ）

綾人＆ヒナギク「が……ッ！」

チームB

ブルズ「っ、強い……！」

コルト「言ってる内容は色々残念だけど、手強いのは確かだね……。流石はあのフラメの父親だ」

ブルズ「けど、コレはある意味チャンスだ。あっちのチームには悪いけど、この隙に急いでこっちは指令をクリアしよう」

ブルズ「だな。ユウも遅れるみたいだし、少しでもリードを稼いでおかないとな。ええと……、スタッフは……（辺りを見回す）」

コルト「あ、あそこにいた」

スタッフ「……あ。コルトさんにブルズさんですね。お待ちしてありました。こちらが指令になります」

コルト「ありがとうございます。どれどれ……」

ブルズ「何て書いてあるんだ？」

コルト「『地図の先に書いてある場所に行つて、そこにいる人の自己アピールを全部聞け』だつて」

ブルズ「何だそれ？ まあ、戦つたりつて言うのと違ってすぐに終わるだろうから良いか」

コルト「当たりを引いたつて考えて良いのかな？ 早く行こう、ブルズ」

（それから20分後）

コルト「……つて、思つてた時期が僕にもありました……」

ブルズ「まさか、こんなに長々と自分の事を話すヤツがいたなんて……」

モント「（前略）好きな曲は聞いた事ねえですけど『403』の『Blaze of life』。好きな言葉は金声玉振^{きんせいぎょくしん}。趣味は空

間コーディネートと髪の毛の手入れ。最近は植物栽培にハマってますけど、中でもトリカブトとキョウチクトウの育成には自信があります。そうそう。そう言えば最近になって武器集めを始めたんですけど、やっぱり斧は刃の角度が大事ですね。それを分かってねえヤツは」

コルト「いるんだね……。放って置くと延々自分の事を話す人って……（バタツ）」

ブルズ「誰か……アイツの自己紹介を止めてくれ……（ガクツ）」
チームC

セロ「スクライア」（間一髪で飛んで来たボールをかわしつつ）のわっ！ 危なッ！」

デミル「オズマ」（足元を確認して）ッ、トリモチか……しかも臭い……」

ザラックく（頭にバケツを被りびしょ濡れになりながら）仮にも歴史に名を残す聖王の癖に、随分と悪辣な事をしてくれるな……！>

セロ「『初代聖王・エレオノーレ』ゼーゲブレヒトを捕まえて、持っているカードを奪い取れ』……か。全く、とんだ外れクジを引いたな……」

デミル「まさか彼女のいる森に入るなり罠の洗礼を受けるなんて思わなかったよ……ん？ 何コレ？」

（星型の石を拾おうとする）

ザラック「待て！ 迂闊に触……」

（拾った瞬間爆発。それと同時に、大量のチョークの粉が辺りを包み込む）

ゼロ「ゲホツゲホツゲホツゲホツ……！」

ザラック<クツ、視界が……！>

エレオノーレ「罌に掛かって頂き、ありがとうございます」

デミル「この声は……！」

ザラック<来たか……！>

エレオノーレ「（高い木の上に立って）赤い血潮を身体に流し！ オレンジ夕日を背に浴びる！ 黄色い歓声人気者、フレッシュグリーンいざ参る！」

（ポーズを取る度に次々にカラフルな爆発が背後に起こる）

ゼロ「ザラック……彼女って、初代聖王……」

デミル「資料では、騎士の鑑と謳われた……」

ザラック<言うな……。俺もアレが聖王だなどと言う事実を、何かの間違いだと思いたいのだ……>

エレオノーレ「その身を守るは青き衣！ 藍色紫何かイイ！ 虹色纏った！ その名も……」

3人―（一斉攻撃）

エレオノーレ「わわっ！？ わっ、わっ！！！」

（バランスを崩しながらも地面に着地）

エレオノーレ「い、いきなり何をするんですか！ 名乗りの最中だったと言っのに！」

3人「何処の戦隊ヒーロー！？ たった1人なのに長過ぎるだろ（でしょう）！」

エレオノーレ「大晦日スペシャルバージョンです。3日掛けてリハも完璧にした傑作だったんですよ」

ゼロ「勿体無い！ 時間が勿体無い！」

エレオノーレ「なッ！？ ……わ、私の努力が無駄だと言っんですか！？」

ザラツク「そんな事はどうでも良い。エレオノーレ、持っているカードを渡して貰おう」

エレオノーレ「い・や・で・す。今さっきの台詞のせいで渡す気を無くしましたー」

デミル「子供ですか！」

エレオノーレ「どうしても言っのでしたら、私を倒してから奪い

取ってみて下さい。……出来れば、ですが」

（エレオノーレの背後の空間が歪み、無数の武器がそこから現れる）

セロ&デミル「！？」

ザラツク「来たか……。ヤツの稀少技能^{レアスキル}、幻想宝物^{ファンタジック・コレクション}が……。！ お前達、こうなったら死ぬ気で掛かれ！>

セロ「ああ！」

デミル「はい！」

エレオノーレ「さあ、行きますよ！」

チームD

クロスロード「ナカジマ、今の所は僕らが一番乗り、か」

ノア「ナカジマ、マスター、このままパーツと仏血斬……基ぶつちぎっちゃいましょう！」

クロス「今なんか物騒な言葉が聞こえた様な……」

ノア「やだなあマスター。幻聴ですよ」

クロス「……だろうね、うん。けどこの指令……（渡された紙を見ながら）」

ノア「フラメの叔母さん……。つまりさっきのエレオノーレのお母さんから先に行くのに必要なカードを貰う、でしたよね？」

クロス「うん。でもさっきのアレを観てたら、何だか不安になって来て……」

ノア「……………。た、多分大丈夫ですよ！ 何だかんだでエレオノールさんとは会話が成立してましたし！」

クロス「そうであって欲しいなあ……………あ、着いた。綺麗な城だなあ……………」

ノア「森の中の白亜の城って、オシャレですよ……………」

女性「いらっしやうい」

クロス「こんにちは。ええと…………、『エリノア』ゼーゲブレヒトさんですか？」

エリノア「ええ、そうよ。アナタ達がクロスロード君とノアちゃんよね？」

クロス「あ、はい」

ノア「宜しく願いしまーす」

エリノア「（お辞儀をしながら）こちらこそ宜しくねー」

クロス（『良かった…………。思い切り普通の人だ。しかもホンワカした優しいような感じの』）

ノア（『当たりを引きましたね、マスター』）

エリノア「年末お疲れ様。えーと、カードだったわね」

クロス「あ、はい」

エリノア「それじゃあどうぞ……って言いたいんだけど、少し条件があるわ」

クロス「何ですか？」

エリノア「カードは、私の書斎の中にある本の栞にしてあるの。大量の本の中からそれを探すのが私からの条件よ」

ノア「探知魔法とかは使って良いんですね？」

エリノア「勿論 2人共、頑張ってね」

クロス&ノア「はい！」

（城内に入る）

従者「あ、エリノア様。尋ねて来られた企画参加の方はどちらにいらっしゃいますか？」

エリノア「あの子達ならお城の中に行ったわ。元気があるって良いわね」

従者「ダメでしょう入れては！」

エリノア「何で？」

従者「何時も申し上げていますが、あの城にはエリノア様をお守りする為に我々従者以外を排除するトラップが仕掛けられているんです！ 今すぐ解除の術式を施さないと……」

エリノア「あー……」

クロス&ノア「うわああああッ！！！！！！」

（爆音と何かが崩れる音が響く）

従者「大丈夫ですかああああッ！！！！」

チームE

シキ^{クロカミ}「K^ミ」アスタロト「（モニターを確認しながら）ふむ……彼女も“ハズレ”だったか」

蒼月竜哉^{そつぎ・たつや}「オレは最初から嫌な予感がしてたよ……。天然っぽかったからな、さっきの人」

天戸翔^{あまと・かける}「だよ……。ああ言うタイプの人間って下手に賢いヤツより性質悪かったりするからな……」

竜哉「100%善意なせいで糾弾し辛いつてもあるしなあ……。アレならまだテメエの事しか考えてねえヤツと会話する方がマシだな」

翔「ところで話は変わるけどさ、ミッドチルダって色んなヤツがいるよな」

竜哉「ホントにガリと内容変えやがったな……。まあ確かに色んなヤツがいるし、来てやがるよな」

翔「それで不思議なのが、そいつらの多くが全身装甲みたいなデバイスを持つてゐるって事だな。こないだフェイトから聞いた話じゃ、持ち主共々戦闘機みたいな形に変形するデバイスを持った次元漂流者が出たらしいぜ」

竜哉「それなら俺もディエチから聞いた。何でもカリムにセクハラしようとしてルパンダイブした所を投げ槍の一撃で叩き落とされたんだってな」

翔「ああ。何か“俺の知ってるカリムと違う”とか言ってたらしいけど、どーいう事なんだろうな？」

竜哉「さあな。まあイタイ電波を受信した野郎の頭の中なんか興味ねえや。スカリエッティのヤツはそいつの持ってた『アリオス』ってデバイスに無茶苦茶興味あったらしくて拘置所内でデモンション上げてたらしいけど」

翔「看守の苦勞が目に見えかぶ様だ……」

シキ「こほん。2人共、雑談に花を咲かせている所申し訳無いのだが……あちらの2人を止めるのを手伝ってはくれないか？ でないと我々は何時まで経ってもココから先に進めないのだが……」

セフィロス「（前略）イカにはダイオウイカと呼ばれる非常に巨大な種が存在しているが、タコにはそれと肩を並べるに足る存在はいない。コレが優劣の決定的な差でなくて何だと言うのだ？」

ドンナー「は、タダでつかいだけで勝ったとか笑わせないでよ。タコには高度な擬態能力があるし、自分で殻を作るのだっているのよ。それにイカは小魚みたいな弱いのがメインだけど、タコはウニやサザエもカニも殻を噛み砕いて食べてる。どっちの方が器用かつ遅しいかなんて一目瞭然でしょ？」

セフィロス「愚かな。気の合わない輩が同じ水槽にいただけで気が狂って己の脚を食む様な薄弱な精神の生き物が遅しいとは」

ドンナー「水揚げされた時点で生きてられない様なダイオウイカに比べたら万倍凄いわよ。そもそもタコはあんな肉の塊みたいな姿にはならないもの。て言つかあの外見、イカなんか比べ物にならない位可愛いし」

セフィロス「フツ……ゲツソーも知らん小娘が。アレに比肩する愛嬌のある容姿を持ったマスコットなど、デビルフィッシュ悪魔の魚の中には存在するまい」

ドンナー「アンタ……、今言っちゃいけない事を……！ そんなにイカのフルコースにされたいのなら、望み通りにしてやるわよ！」

セフィロス「クッククック……斬り捨ててワサビ醤油で食してくれ」

翔「おいちよつと待て落ち着けお前ら！」

竜哉「つかイカもタコも元々はコウモリダコって言う生き物から派生しただけの仲間だ」……」

セフィロス&ドンナー「一緒にするな!!!!」

(息ピッタリの同時攻撃)

翔&竜哉「のわあああッ!!!!!!」

シキ(間一髪避けた)「……………済まない。不毛な争いを延々聞かされ続けたせいで精神的な疲労が……。辞退させては貰えないだろうか」スタジオ

ゲスト全員「……………」

ルナマリア「私が言うのもアレだけどさ、凄いカオスよね…………」

ラクス「聖王家と聖王正教って、まともな人がいませんわね…………」

シュウ「それ、ラクスさんの言えた台詞じゃないです」

泰子「君らも彼らに負けず劣らずの変人だからな」

ラクス「私は普通の心算なのですが……。この思考はアヴェンジャー……………駄作製造機と同じですから」

リオス「いや、まずアヴェンジャーが変なんだと認識しようよ」

フラメ「(頭を抱えながら)……………アデル、後であのDad……………F c k i n g d a n d y に伝言頼む」

アデル<畏まりました。伝言内容はどの様に?>

フラメ「……放送禁止用語の連発になるからMailで伝えるよ。
まあ5文字で言うなら“ブチ カク”って所だけどね」

アデル<了解しました。……私からサラマイド様 バカダン
ディーへの罵倒も付け加えて宜しいでしょうか？>

フラメ「Of course・来年一杯引き籠る位の精神的Damageを与えてやってくれ。今から綾人達に助っ人しに行かなきゃ
ならないし」

アデル<カレン様……精神的な意味で御武運を>

フラメ「Thank you……。メイリン、私はちよつと綾人達
を助けて来る。その後は多分……いや確実に戦闘不能になって司会
どころじゃないから、エルデが代わりに来るまでの間だけルナとラ
クスを頼む」

メイリン「分かりました。その……私で良ければ相談に乗りますか
ら、元気出して下さいね」

フラメ「Thank you……」

(フラメが転移)

チームA

サラマイド「ハハハハハ！ 温い！ 温いぞ！」

(剣を振って魔力斬撃を飛ばす)

ヒナギク「クツ……、強過ぎる……。こっちの攻撃がまるで通用し

ないなんて……」

綾人「（後ろで倒壊するビルを見ながら）攻撃力も半端じゃない……。あんなの1発でも喰らったらアウトだ……！」

ヒナギク「コレは……本格的に詰みですかね……」

綾人「全く……何でこんな事に……」

ヒナギク「アナタのせいでしょう！ 台詞だけで良いのに煽るから！」

サラマイド「そろそろ止めを刺してやろう……。私のレンレンを嫁に貰おうとしたその度胸を買って、一撃で決めてやる」

デバイス<フルドライブ>

サラマイド「はあああああッ……！」

フラメ「綾人、ヒナギク。今から私が援護してやる。アレの動きを一瞬だけ止めてやるから、その隙に全力の攻撃をやツに叩き込め」

綾人「『良いのか？ ……なんて聞いている暇は無さそうだな。分かった』」

ヒナギク「『ありがとうございます』」

サラマイド「とおど……」

フラメ（『思い切りぶりっこした口調で）Daddy、大好き
I love you 』）

サラマイド「!? レンレンの声!?!」

（攻撃を中断して周囲を見回す）

綾人&ヒナギク「今だ!?!」

（同時攻撃）

サラマイド「え? ちょっ、待つ……のわあああああッ!?!」

（爆発に吞まれる）

綾人「か、勝った……」

ヒナギク「（気絶しているサラマイドを見ながら）何てマヌケな勝ち方……でも取り敢えずコレで先に進めますね」

ヒナギク（『フラメさん、ありがとうございます』）

フラメ（『ど、どう致しまして……。Shit……気分が悪くなつて来た……。おえええ……』）

綾人（『その……、済まない……』）

フラメ（『頼む2人共……。今の台詞の事は黙っててくれ……』）

綾人（『わ、分かった……』）

ヒナギク（『分かりました……』）

綾人（『けどさ、アレ後でもう1回やってくれないか？』）

フラメ（『！？』）

ファイム「何かあったんですか？」

綾人＆ヒナギク「いや、何でも」

ファイム「？」

チームC

一方その頃、セロ＆ザラック＆デミル

ザラック＜（降り注ぐ武器の雨を避けながら）クソ……！　まるで
隙が見当たらん＞

セロ「（全力で障壁を展開しながら）攻撃を避けてるのに……、余
波だけでダメージが……」

デミル「（障壁を打ち破られて）グッ……！　済まない……僕はこ
こまでみたいだ……」

セロ「デミル！　クッ……！」

エレオノーレ「フッフッフ……。これで私の勝ちね。最後はカッコ

良く決めてあげます……エクスカリバー！ ロンゴミアント！」

エクスカリバー＆ロンゴミアント＜御意＞

エレオノーレ「ウェポン・バルカ武具融合……デルファイロス始原の業火！」

セロ「アレは……！」

ザラック＜グツ……！＞

エレオノーレ「行きますよ……！」

セロ「……ッ！」

エレオノーレ「ファイナルタキオンガーディアンズギャラクシーバ
ーニング……」

セロ「（斬り付けながら）技名が長い！」

エレオノーレ「グツ……！ なら、ハイパーエターナルビッグバン
フォース……」

セロ「アイス・エッジ！」

エレオノーレ「嘘おおおおッ!?」

エクスカリバー＜だから技名は簡潔にしてくださいと申し上げたのに
……！＞

ザラック＜手に屁を握る様な結末になっちゃったな……ともあれ

コレで先に進め……>

アデル<ああ、済みません。そちらが長々と戦っているうちにゴールした人が出ました>

ザラツク<何！？ 何処の誰だ！>

チームA

綾人「もうゴールしたヤツが？ 早いな……」

ヒナギク「アデルさん、誰なんですか？」

アデル<……チームBのユウ「クロサキさんです……。道に迷っていた所をエルデ様に連れられて此処エルセアに着いたのですが、ゲーム開始と同時に持ち前の方向音痴スキルを発揮してアルハザードに……>

綾人<ミラクル過ぎるな……>

「回想」

ユウ「クロサキ「ココは何処だ……？ 面倒臭えけど調べるか……」

（別の次元世界の地図を逆さに見ながら）

ユウ「えーと……学園都市の第三学区か。クソ、まだ歩かねえといけねえのか……面倒臭えなあ……」

アデル<もうアルハザードにゴールしてるのに何処に行く気ですか

……取り敢えずアナタのチームが優勝したのでエルセアに戻しますよ>

ユウ「マジか！？　そう言やヤケに寂れてんなとは思ってたけどよ……
…転送頼むわ」

（ユウが転移）

ラクス「……あちらも終わった様ですわね」

メイリン「ですね。丁度年も明けますし、一旦全体休憩にして年明けを待ちましょうか」

ルナマリア「それが良いわね。皆もそれで良い？」

クラウド「異論は無い」

白「右に同じなのです」

リオス「僕も賛成だよ」

ラクス「では、今年はココまでとしましょう。皆様、良いお年を」

（後書き）

ここまで読んで頂き、本当にありがとうございます！

次は明日（2012年1月1日）の13時に投稿される御正月特番
「カオス色シンフォニー」でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470z/>

大晦日特番「Narou/Zero」

2011年12月31日22時46分発行